



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



和食クッキングin田町リーブラ

安部 花子

5月7日、田町リーブラでの和食料理教室に参加しました安部と申します。以前ロシア料理教室に参加し、ロシア人参加者の皆様にとっても温かくおもてなししていただいたので、今回は和食にチャレンジするロシア人参加者をサポートするべく参加する運びとなりました。



今回の献立は、カツオ漬け丼・若竹煮・ソラマメのかき揚げの三品。誰でも美味しく食べられて初心者にも作りやすい、なおかつ本格的な旬の和食メニューを講師の小野田正子先生が企画してくださいました。無駄なく使いきれてゴミの出にくい食材を選定してくださっているのも、会場の後片付けを担当する身としては心強いです。

日本人参加者とロシア人・ロシア語圏出身参加者の割合はおおよそ半々で、日本人にはなじみ深いタケノコやソラマメといった食材も、彼らからするとあまり食べる習慣がないものもあるようで非常に興味深かったです。和食や日本のものに対する外国人のリアクションを間近に見られるというのは、今回のような日本のものがテーマとなっているイベントの醍醐味かもしれません。

いざ料理がスタート。揚げ物あり、煮物あり、漬けもありと、所要時間も調理法も異なる各料理を全て同時に食べ始められるよう、最も効率の良い段取りを先生が指示してくださいます。明るいお人柄で、初心者でもレクチャーを聞いている途中から早く作りたくてうずうずしてしまうような、分かりやすい説明をしてくださいます。

私のグループにも、来日したてのロシア語圏出身の男性が1人いらしたので、その方が調理のメイン部分を楽しめるよう、私は調理器具を使いやすいように整えたり、野菜の剥きカスを集めて卓上を清潔に保ったりしながら、横目でチラチラとみていました。「菜箸とか包丁とか、苦戦していたら助けてあげなきゃ」「刺身の平造りなんてできないだろうな～、引き切りとか教えてあげよう」。和食どころ

か、普段料理すらしらない自分のことは棚に上げて、正直そのような気持ちで構えていたのですが…。

蓋を開けてみるとビックリ。モルドバ料理店での厨房経験がある彼は、繊細な手さばきでカツオの柵を薄造りにし、的確なアドバイスで私のソラマメ剥きの師匠となりました。先生のレクチャーを見て翻訳を聞き、すぐに手元で再現させる様

を見ると、先生の説明の分かりやすさもさることながら、料理の心得がある人どうしというのは、何か言葉を越えた共通言語のようなものがあるのかもしれない。

あっという間に3品が完成！実は正直に白状すると、私はカツオとソラマメが少し苦手で普段はあまり口にしないのですが、みんなで作ったという達成感に加え、先生の調理法によってクセや臭みが消え、まろやかさの中にもしっかりと素材の美味しさが引き立つ仕上がりに、気づけば誰よりも早く完食してしまいました。こういった発見があるから料理教室って楽しいなと思います。日本人以外の参加者の皆さんも、初めて調理した食材に大満足のご様子。あっという間に皆さん完食し、とても美味しかった…と感動しきりでした。

今もまさにこの記事執筆しながら、冷蔵庫にはさっそく自分で漬けてみたカツオが入っていて、食べるのを楽しみに筆を進めています。新しい扉を開いてくださった講師の小野田先生、参加者の皆さん、そして運営の皆さん、本当にありがとうございました。

お知らせ

●ロシア語クラス生徒募集中！

水曜 初級1A-1 (19:00～20:00) 1A-2 (20:05～21:05)

土曜 上級 (10:00～11:30)

オンラインクラス月曜 準中級 (18:00～19:00)、

日曜 ゼロからクラス (18:00～19:00)

「ロシア語の泉」13:30～16:00

*見学もできます。変更の場合もありますので前もって事務局までお問い合わせください。

●ロシア語合宿

日時: 8月26日(金)～28日(日) 沼津市戸田にて

会費: 28,000 (授業料、宿泊費、朝、夕食代)

●キルギスの家庭料理講習会

日時: 7月2日(土) 13:30～14:00

会場: 田町「リーブラ」 会費: 2500円

●留学生と交流ワークショップ

習字、折り紙、和食講習会、イワン・クパーラ(スラブの夏至祭り)に参加しよう！

E-Mail: nichiro@nichiro.org Tel: 03-5563-0626

*「日口交流」は8月はお休みです。

お願い

NPO 日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらでも結構です。

小川久美子氏、殿岡託氏にご協力いただきました。ありがとうございます。

振込先: 郵便口座 00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org

世界音楽の旅

藤本 信義

「世界音楽の旅」は音楽を切り口に世界のさまざまな場所を旅する講座として、コロナの巣ごもりの続く中2020年12月にインドネシア編を第一回としてスタートしました。つくば市を活動の中心とする国際交流団体「SWiT」の中から生まれたこのオンライン講座は2022年5月のモンゴル編その1で既に21回を数えます。その中で2022年4月の第20回 ユーラシア編を担当しました。

講師の依頼を受けたのは昨年の12月、そのころ開催されたリトアニア編やチェコ編などの東欧の講座に続けてロシア・ウクライナ編として構想していたのですが、なんと皮肉なことでしょうか、2月には両国が戦争状態に入ってしまった、この内容での開催が難しくなっていました。最初は一緒に参加していただくつもりだったウクライナご出身の方の協力も難しくなっていました。

しかし、長い歴史を持つ音楽、多くの人々の交流が支えた文化の力がわずかでも政治に翻弄される世界に対抗できるならばと思ひ、より広いユーラシア&宇宙編として講演内容を広げ、内容をロシア・ウクライナに限定しない広い範囲をカバーするように準備をすすめて、4月中旬に無事に実施することができました。

ユーラシア&宇宙編とすることで 地域もロシア、ウクライナにかザフスタンと日本を加え、旅する都市としても 宇宙にかかわりの深いバイコヌール (Байконур)、中央アジアの平原、サマラ (Самара)、Москва、Хабаровск 等をめぐる旅としました。

音楽については クラシック音楽では チャイコフスキー、ムソルグスキーから現代のショスタコービッチ等の逸話を紹介しました。人類最初に宇宙飛行したガガーリンがロズさんだショスタコービッチの“祖国は聞いている”、他民族の融和を願ったボロディンの“中央アジアの草原にて”や旅の安全を祈るコーランの詠唱等のお話はクラシックファンの方にも新鮮な話題であったかと思います。

ロシア民謡では“ステンカラージンの歌”、“ボルガの舟歌”、“アムール河の波”等日本でもよく知られている歌の数々を取りあげました。ロシア民謡は古い音楽の節に西洋の和声を取り入れて近代になって整理された「ロシア歌謡」というべきジャンルです。

また、世界に広がる日本のアニメということで、エヴァンゲリオン主題歌のロシア語版、ガールズアンドパンツァーの中で歌われたカチューシャ等を取り上げ幅広いジャンルの音楽を聴きながら 東西1万キロを1時間半で旅する“バーチャルツアー”を楽しんでいただく形で開催させていただきました。

5月の今日時点では戦争の行く末はわからず、日々多くの犠牲者が出ている中ではありますが、私たちは将来この悲しい分断を克服しなければなりません。音楽と旅と文化を守ることがその時力になるようにと願います。また、その時には改めて世界音楽の旅ロシア編 Ver 2をお届けしたいと思います。

ウズベキスタン便り

寺尾 千之

この6月18日(土)に、約3年ぶりにNORIKO学級交流会&懇親会を開きました。設立者・大崎紀子さんとガニシエル校長、流山フェスタ・スタッフ、日本語講師、日本企業勤務の卒業生など関係者35名が集いました。交流会場には2001年～2004年に8回ウズベクブースを展開した「流山フェスタ」開催地・流山市生涯学習センターを選びました。ガニシエル校長に、是非とも支援活動の第一歩を踏み出したこの地を見ておいて欲しかったのです。



彼の来日目的は、舞鶴市、新居浜市など全国各地で、1-2年前から実習中の学級出身留学生の様子を確認することでした。今後もそのような留学生の増加が見込まれ「学級の方向性を見失わないために、原点とそれからを再確認する」ことも必須と考えられました。

彼の来日目的は、舞鶴市、新居浜市など全国各地で、1-2年前から実習中の学級出身留学生の様子を確認することでした。今後もそのような留学生の増加が見込まれ「学級の方向性を見失わないために、原点とそれからを再確認する」ことも必須と考えられました。

整理しますと、2001年、主不在となった学級を現地の子ども達のために存続させるため誕生したのがリシタン・ジャパンセンター事務局(重勝さん命名)でした。当時、ナマンガンの日・ウズジョイントベンチャーに駐在中だった夫と、比較文化人類学のフィールドワークのため学級前に建つガニシエル宅に滞在中だった東大院生から、的確なリアルタイム現地情報を入手できた私が事務局長役に就きました。主な支援活動は、イベントでのウズベク民芸品売上全額寄付と、神田外大生を筆頭に軌道に乗り始めた日本語ボランティア講師

派遣の2本柱でした。今日まで20年以上続いてきた活動も、時代の移り変わりと共に、分岐点に差し掛かってきたように思います。

ITの進歩により、学級ボランティアや訪問希望者は、ガニシエル校長に直接連絡ができて、現地発信のクラウドファンディングで寄

金も集められるようになりました。更には、NORIKO学級の発展ぶりが評価され、ガニシエル校長にフェルガナ州から寄贈された3haの土地を基点に、彼は何らかのビジネスに着手する予定でもあります。今後は、誤解を招かないよう、利益追求が主目的の「ビジネス活動の原点はガニシエルさんと現地駐在の日本人」「NORIKO学級ボランティア活動の原点は大崎さんご夫妻」のように、分けて考える必要もありそうです。事務局にとって、今回これら新情報を入手できたことは有意義でした。

参加者にとっては、10～20年ぶりの再会に沸き、日本人顔負けのウズベク人の日本語に唸る、嬉しい驚き連発の会になりました。多才なサポーターによる「笑いヨガ」レッスン時の「嘘でも笑っているうち本当の笑いになります」との言葉通りになった交流会終了後の集合写真をご覧ください。

IT時代とはいえ、書籍「ウズベキスタン・ガイド」(彩流社・萩野矢慶記著)の読者から届くボランティア希望メール対応や、交流会翌日から届き始めた多くの交流会リクエストに応えるためにも、事務局長役は、もう少し続きそうです。

(リシタン・ジャパンセンター事務局長)

コラム:

ロシアにおける鉄道事情

島山 堅蔵

1. まずは数字でロシア鉄道事情を理解するところから始めたい。
 - 1) 1836年4月（江戸時代・天保7年）ロシア帝国はサンクト・ペテルスブルグ・セロ27kmの鉄道建設を開始した。2019年時点の鉄道総距離は85,600km（うち電化率50.7%）。（日本の鉄道総距離は27,182kmで世界11位。全国平均電化率67.11%。）
 - 2) 保有車両：機関車/14,900両（日本/914両）、電車/35,700両（日本/49,614両）2019年、ロシア国鉄は12億人の乗客を運び、GDPの貢献度は1.4%である。
 - 3) ロシア鉄道の軌道幅（軌間）は1520mmで、現在使用されている国は旧ソ連諸国、旧東欧、モンゴルを含め24カ国。（日本は狭軌と呼ばれる1067mmを採用しており、新幹線は1435mmの世界標準軌間）軌間は隣国との歴史的相互関係を端的に表している。
2. ロシア鉄道の特徴
 - 1) 2003年9月に政府令によりそれまで「鉄道省（MPS）」であった組織の大部分は「ロシア国営鉄道株式会社（RZD）」に改編され引き継がれた。本来目標は「鉄道省」→「国営会社」→「民間資本」を49%導入予定であったが未だ民営化は進んでいない。
 - 2) 最大のニュースは今年4月11日に国際スワップ・デリバティブ協会（ISDA）の「クレジット・デリバティブ決定委員会」は、ロシア国営鉄道会社が、外貨建て債務の利払いができず、デフォルト（債務不履行）と認定したことがわかったこと。
 - 3) 国土が広いので、鉄道輸送が発達しているが、車両の「老朽率」がクローズアップされている。「老朽率」とは設計上の車両

- 寿命年数以上に稼働している車両の割合のこと。ロシア人を日本の旅客鉄道会社に招待し、打ち合わせ時にこの質問がロシア側から出され、日本側の回答は「ゼロ」だった。日本では規定使用期間が過ぎると廃棄され、新車と交換されるため「老朽率はゼロ」となる。ロシア人はこれを聴き驚いていたのが印象的。
- 4) 先端技術の採用が遅れている。1996年11月にエリツィン大統領により、「ロシア企業における新世代旅客車両開発製造計画（1996-2005年）」が公表された。ソ連邦崩壊（1991年12月）後、国内での車両生産がほぼなくなり、著しく老朽した車両の更新、新規技術の導入を目指し本計画は採択された。近距離電車に関しては「ランニングコストの低減を目的としたインバーター（交流）駆動車の導入」が動き、Big 3 メーカーと競合しながら多くの案件が進められた。
 3. 地下鉄の特徴（ソ連時代、人口100万人以上の都市に地下鉄が建設された。）
 - ①ロシアの地下鉄は1935年5月モスクワで開通した。（日本は1927年開通。）②非常に深い（ウクライナ・キウでは地上からなんと105.5m！都営大江戸線で一番深い六本木駅が42.3mなので、その約2.5倍もの深さにある。）シェルターとして利用。③停車時間は15秒（この間に乗客は降りて・乗ることになり、非常に短い。）
 - 3) 基本的に利用距離に関係なく均一運賃（地下鉄に入って出るまでは同じ料金。）
- 今回は「ロシア経済全般について」です。（事務局長）

戦前の樺太の「ロシアパン」記録と追憶

倉田 有佳

戦前の樺太（1905-1945年）には、「ロシアパン」という名物があった。製造販売に携わっていたのは、「残留ロシア人」（ここにはポーランド人やタタール人も含まれた）と呼ばれた人たちで、その数は1500人前後を数えた。

鉄道駅のプラットフォームで売られた「ロシアパン」は、内地からの旅行者が好んで買い求めた。日本人が作ったパンのようにねちゃねちゃせず、舌ざわりが良く、焼き上がりが絶妙だと絶賛された。パンの製造販売は、主にポーランド人が携わっていた。

1930年代半ばにもなると、内地のパンも亡命（白系）ロシア人や彼らの指導をみっちり受けた日本人職人のおかげで、格段にレベルアップしたからだろうか、「味は子供の好きそうな甘さで、内地で日本人の焼いたパンの方がよっぽど美味しい。」、と酷評されることもあった（林芙美子「樺太への旅」1934年）。けなされたのは、「ポーランドのパン」と誇示し、白浦駅で牛乳とセットで販売されていたアダム・ムロチコフスキーのパンだった。

他方で、米の育ため樺太では、元よりパンは身近な食べ物だった。「パンの味が判るか」と思いたくなるような「田舎者らしいのがパクパク美味しそうにやっていると

ころは、ほかの田舎では見られない」（『読売新聞』1925年8月8日）、と内地からやってきた記者を驚かせた。独自のパン文化が樺太には根付いており、樺太で生ま

れ育った「樺太っ子」世代は、「ロシアパン」のお得意様になっていった。

ただし、「ロシアパン」の作り手も、「酸っぱい様な、甘い様な、一種独特な」味（『読売新聞』1930年8月9日）に必ずしも固執せず、ジャムやクリーム入りパンをあみだし、これが好評を博した（『樺太日日新聞』1927年5月27日）。不景気でパンの売れ行きが落ち込むと、アンパンやバター入りパンを、何も入っていないパンと同価格で販売した（『樺太日日新聞』1930年11月1日）。

樺太40年の前半には、残留ロシア人や「ロシアパン」は異国的情景として旅行者の紀行文に描かれた。だが時代が下るにつれ、「ロシアパン」は味や形を進化させながら樺太の日常に溶け込んでいった。

女学校2年で終戦を迎えたという女性が、半世紀を経て、ア



帽子と木箱に「ポーランドのパン」の文字が見えるため、売り子はムロチコフスキーか？『Grosses Japan: (Dai Nippon)』1937年発行、1942年再版。発行地ドイツ、名取洋之助撮影。

ンパンの思い出を地元紙に投稿している。そこには、新場駅（大泊と豊原の中間駅。西海岸の支線への乗り換えに30分程度の待ち時間があつた）での一番人気は、ロシア人のおじいさんの自家製「ロシアのアンパン」だったこと、当時の友人たちも、「よく覚えている。あんこがいっぱい入っていて、おいしかったね」、と口をそろえて懐かしがったことが綴られている（『北海道新聞』1998年4月24日）。

最大で約40万人を数えた樺太在住者も高齢化が進む一方だが、記録や記憶はつないでゆきたい。（ロシア極東連邦総合大学函館校教授）

半世紀昔のハバーロフスク

畔上 明

ロシア軍のウクライナ侵攻という悲惨な状況は2月24日以降連日のニュースを占め（むしろ、ウクライナ国内での山積した問題により8年も前から戦争状態が続いていたことが今になって顕在化したこともあり）長期化してしまっているその先が見えてこない身を引裂かれるような辛さに、一昨年他界した恩師であれば現状をどのようにおっしゃるであろうか、と考えたのでした。ロシア語、文学、思想といったロシアの文化の奥深さを教えて下さった恩師が眠る新緑に囲まれた秩父の丘を訪れ、墓前に佇むと先生の悲しみに満ちた声が聞こえてくるようです。

今から丁度50年前1972年に初めて旧ソ連邦を旅して回ったのは、書物の中だけではない世界を見るべきだという先生のお話に突き動かされ、夜警や塾、蕎麦屋の出前などのアルバイト代から毎月2万円を旅費に積立て15ヶ月経って30万円になったところで、1ヶ月の旅の計画を実行した思い出が蘇ります。

初めて日本を離れたときは、まさかその後今日に至るまで90回近くも大陸を渡るなどとはゆめゆめ思いもしませんでした。旅情報が十分とはいえなかった時代、ナホトカ航路で緑広がる大陸が眼前に現れ、さて足を踏みしめるときは、現実か夢か、この世と思えぬような浮き立った高揚した気持での第一歩、しかし岸辺の少年から掛けられた第一声は「ジュヴァーチキ（チューインガムある）？」まるで敗戦後の日本での進駐軍に向けたかの如き思いもよらぬカルチャーショックから始まりました。

当時、ウラジヴォストークは軍港として外国人の立入りが出来ないこともありナホトカから列車で迂回して北上、最初

にロシアの大地を歩いたといえるのがハバーロフスクです。アムール川の雄大さ、坂道の多い素朴ながらも清楚な街の印象に圧倒されつつ、一週間のシベリア鉄道出発前のここはやる思いを抑えてモスクワ、レニングラートへと向かいました。更にタラス・シェフチェンコの詩「私が死んだら懐かしいウクライナ / 広い丘の上に埋めてくれ / 限らない畑とドニエプルと険しい岸辺がみられるように…」に惹かれてキエフへ、そして黒海の港オデッサ、中央アジアのサマルカンドなど巡り、振出しのハバーロフスクに戻ってきたのが秋の気配が深まる頃でした。

異国の空気に慣れ、純朴な人々との出会いと別れを繰り返してきたこともあり、宿泊ホテル「アムール」を出たレーニン通りですれ違った同年代の若者から声を掛けられたときも何の違和感もなく振向くと、「あんちゃん！」何と日本語、しかも顔立ちも日本人、人懐っこくアパートへと誘われてお茶をご馳走になったのですが、出身がトヨハラ（樺太時代の地名）、名前がサーシャ・オキムラ、それ以外はすべてロシア語、話を聞くうちに戦後四半世紀を経たとはいえ戦火により運命を翻弄された日本人、その次世代が暮していることを思い知らされたのです。

十数年後ペレストロイカによりサハリンへの渡航が可能となった頃に、日経新聞社の小川峯一（1931-2017）さんと出会い「サハリン同胞一時帰国促進の会」の運動を始められたそのお手伝いをしたのは、ハバーロフスクでのサーシャとの出会いが頭から離れなかったことがありました。

（「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー）



きもの体験交流(2)

千葉 麻里

4月30日（土）10時半から田町のリーブラ和室にて、通商代表部に引き続き、大使館の方々のきもの体験交流を実施しました。今回は、日頃お手伝いしてもらっている辻田、林、内藤先生と更に五十嵐キミ子先生（きものコンサルタント東京都連評議員）にも加わって頂きました。全員、ふだんの仕事仲間で、やり方も心得ているので手慣れたものです。

大使館からは、女性13人、男性4人、女兒11人、男児6人の計34人が時間差でみえられました。在日ロシア人のプロカメラマンが呼ばれていて、石庭に機材をセットして障子や光の加減を入念にチェックしていました。

今回は、通商代表部に郵送しておいた2箱のきものを、大使館アーニャさんが車で運んでくれたので、持参する必要がありませんでした。リーブラからはまた自宅に宅急便で送ってもらい、本当に助かりました。

写真はプロらしく様々なアングルで撮影に時間をかけていたので、個別にも皆で撮りあって楽しんでいました。好みのきものを着たいので撮影が済むまで待っている人もいて、着付けの方は余裕があ

りました。合間におにぎりをつまんだりしながら、大使館の方々がどんなきものを選ばれるか見たりしました。色の好みも毎年、傾向が違い、今回は子どもたちの人数が多かったです。子どもの場合、背が伸びるのが早いので背丈の違いに差があり、特に男児は調整が大変でした。

午前中から始まって午後3時過ぎによりやく落ち着いたました。いつものように、大使館からは手作りのお菓子をご馳走していただき、ゆっくりと本日の出来栄をお互いに話す時間がありました。来年は、子どもの着物をもう少し用意しよう、とか、明るい色目を選んでおこうとか…

最近、学校でも日本の伝統文化を授業に取り入れる傾向に

ありますが、残念ながら親の代ですでに知らないことがあまりに多くなっているようです。海外でも関心が高いのに、外国の方の質問に満足に答えられる日本人がほとんどいません。むしろ、海外の方から教えられるようなことさえあるようです。私自身は、こうして興味を持った方々が身近にいることがよい勉強になっています。（副会長）

